

21世紀 COE プログラム 「健康・スポーツ科学研究の推進」

西平賀昭

体育科学系教授

筑波大学人間総合科学研究科の体育科学専攻とスポーツ医学専攻の協力のもとで申請した「健康・スポーツ科学研究の推進」が研究拠点形成プログラムとして選定されました。21世紀 COE の書類は、具体的には評価対象者数名で作成しましたが、その間に交わされた会話では「研究費も欲しいが、それよりも研究教育拠点として選ばなければならない」という、大学としてのプライドの方が優先していたように思われました。そういう意味では選定されて本当によかったと思います。特に体育科学の分野が選ばれるならば絶対、筑波大学でなければならないという、強い決意と自負心を持って臨んでの書類作成でした。

「21世紀 COE プログラム (旧 トップ 30)」は我が国の大学が世界のトップレベルの大学に伍して、教育及び研究水準の向上や世界をリードする創造的な人材を育成していくために、競争的環境を構

成し、学問分野ごとに世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援することによって、活力に富み、国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進することを目的としたものでありますので、それに選定されたことは喜びもひとしおです。そこで我々の研究プログラムが何故、研究拠点として採択されたかを考えてみると、研究内容もさることながら、それよりも筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科が体育科学専攻とスポーツ医学専攻合わせて55名の多彩な研究スタッフを有し、研究者層も厚いと認められたことと、1980年3月、第1号の課程博士号を輩出して依頼、今まで110余名の博士号取得者を研究・教育界に送り出している実績とそれを可能にした優れた研究・教育能力が評価されたと考えています。

本プログラムの内容を簡単に紹介すると、本プログラムでは健康・スポーツ科

学分野の研究者養成の拠点としてさらなる発展を図るため、以下の3つの研究プロジェクトを柱として設定し、研究の推進をはかる計画であります。

(1) 幼児から高齢者までの運動能力に基づく生活活性化支援のためのスポーツ・運動プログラムの開発：このプロジェクトでは、心身の発達や老化過程を考慮しながら快適な生活を保証し、生活の質を高め、健康な生活を楽しむ人生を支援するための運動プログラムの開発が必要です。そのために運動効果を分子レベルでとらえるだけでなく、脳科学を基盤とした全身の調節機構や運動調節機構を明らかにするつもりであります。

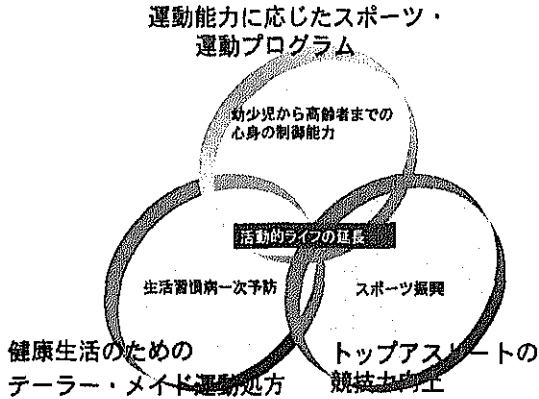
(2) 人間の健康生活の向上のためのプログラム開発とテラー・メイド運動処方確立のためのスポーツ医学的研究：このプロジェクトでは、健常者、障害者、幼児から高齢者までの健康体力の増進のプログラム開発と、身体運動が骨格筋量、骨量、持久的運動能力、代謝・内分泌系、免疫機能およびQOLに及ぼす影響について、分子遺伝学的アプローチの導入による個人の素質を考慮したヘルス・プロモーション策を確立する予定であります。

(3) トップアスリートの競技力向上をはかるトレーニング法の確立：本プロ

ジェクトでは、各スポーツ種目における動作解析のための方法論の研究、スポーツ技術の最適化モデルの探究、競技特性を考慮したトレーニング方法の確立。さらに需要が急激に増大しているアスレチックリハビリテーション開発のガイドライン作成といった課題にも取り組み、「スポーツの科学化」を推進する計画であります。この研究は3つの研究班をつくり、それぞれの専門分野の研究者が協力し、組織的にこの3つの研究課題を解決するように計画しています。

そのためには19名の事業推進担当者ばかりではなく、ポストドクター7名、博士課程の学生18名を加え、組織的に3つの研究分野の研究を押し進める予定であります。研究支援者に選ばれたポストドクター、博士課程の学生は自身の研究課題とCOEの研究を重ね合わせ、成果の公表には具体的な国際誌名をあげ、やる気満々でCOEの研究に参加してきています。さらに博士課程の学生の国際発表を促進するために希望を募ったところ多くの学生が応募してきており、研究業績審査を行い、可能な限り多くの学生に国際学会渡航費を補助する計画であります。

昨年10月にCOEに選定されたにもかかわらず、各研究班の事業推進者は日常



的な研究が滞りなく行われていると見え、平成14年度の研究成果も滑り出しは好調であります。各分野それぞれ国際誌・国際学会に多くの成果を発表することができたと、報告がきております。いよいよ平成15年度は中間評価の年度であります。なお一層の努力を傾注し、すばらしい成果をあげたいと思っています。

最後に COE (center of excellence, 卓越した研究教育拠点) というのは今回あげた3つの課題が解決すればこれで終わりというものではなく、日本を代表する健康・スポーツ科学研究の拠点として、後々までその存在価値を示して欲しいということであり、単なる研究課題解決のセンターではないということでもあります。そういう点において、科学研究費補助金とは違うところがあります。そのた

めにはそれぞれの分野で日本代表する若手研究者を育成し、研究者層の厚さを示し、高い競争力を誇る大学にしたいと思います。

(にしひらよしあき 運動生理学)